

●環境学習農園

それから、これは2年前ですけれども、それまでの栽培収穫体験農園というのを環境学習農園と、看板をかえました。これは横浜市とも相談の上ですけれども、もっと幅広く、いわば農業も、環境、あるいはその緑の世界をもっと日本で豊かにするというような施策にも結びついたので、環境学習農園というのにかえまして、活動の幅を少し広げました。

ですから、野菜づくりだけではなくて、例えば1つ具体的な例を挙げますと、給食調理室の横に生ごみ乾燥機を設置しました。これは大分費用もかかりますけれども、電源も、ちゃんと工事もやりまして、そういった生ごみによるリサイクル堆肥をつくるとかというの、これも教材の1つなんですね。そういうこともやりましたし、これは実は私たちの独力だけではなくて、NPOの日本食品リサイクルネットワークという全国ネットがあります。その協力をいただいております。生ごみ乾燥機だけでも400万しますから、我々独自ではとても無理です。まあ、そういうこと、お手元の概況説明の中にその写真も入れていますので、後で御覧になってください。

それからもう1つ上げるならば、我々のメンバーの中に森林インストラクターの資格を持った人がおります。その方を中心にして、全国森林インストラクターの会という、これもNPOの法人がございまして、連携しまして、自然環境観察学習とか、あるいは林間学校といった学校行事のサポートも一緒に協力してやるという形になって、学校への支援活動の幅を広げつつございます。

そういうふうには、鳥が丘小学校の学校教育の中におけるわくわく農園の位置づけが明確になってきて、私も、先ほど御紹介しました学校運営協議会の委員に教育委員会からも推薦、委嘱されまして、メンバーに入っております。6年半以上、7年近くたって、やっとここまで学校との関係が来れたかなと。信頼関係を築き上げるというのは、やっぱり地道なお互いのコミュニケーションと、時間がかかるものだなというのが学校に対する感想でございます。

●子供たちに変化が一体で感じる力

子供たちがどうかかわったかというのは、やはり子供たちが、元気に成長してたくましく育っていく野菜の姿を見てどんなことを感じてくれるのか。あるいは、花が咲いて実がなるナス、キュウリ、トマト、また花が咲かなくても育つ野菜もたくさんあるわけですけれども、例えばキャベツが丸くなったり、白菜が膨らんだりということに新鮮な驚きをどうやって受けとめてくれるかなと。あるいは、収穫まで成果がわからない。ジャガイモとかサツマイモがそうですね。ただ、掘ったときの驚き、あるいはその姿の迫力に子供たちがどういうふう感動してくれるのか、あるいは、雌花と雄花があるよとか、それをミツバチがどういう役割を果たしているかというようなことまで含めて話したときに、自然におけるそういう連鎖を子供たちが本当にわかってくれるかなという、いろいろなことがございますけれども、これは、私たちが期待した以上に、子供たちはしっかりと把握してくれるというか、感じ方が違うんです。我々はすぐ頭の中でまず理解しようとして。ただ子供は、私たちが勉強したという以上に、子供たちは五感をもって、体全体でそういうものを感じる力がある、そういう能力があるということがますます感じられます。それは、農園に来たときの子供たちのまなざしだとか態度、それからその後の日記や絵画、さっきちょっと触れましたけれども、絵を描かせると、それにしっかりと表現されております。

●食育の重要性

例えば、1つ食材、食べるということに関しては、一般的に、大体8歳から10歳までに、そういう食に対する基本的なすり込みがされると。だから、おふくろの味とかふるさとの味というのは、大体8歳からせいぜい10歳までにすり込まれるそうですね。だから、特に低学年における、広く言えば食育、食べることに對する関心を植えつけるというか、教えるというのは、やっぱり小学校の中の大切な科目、授業ではないかなと思われるわけでございます。ですから、ただ単なる味覚による記憶だけではなくて、あらゆる体験、あるいはそういった実感というものと一緒にすり込まれる。だから、これはビタミンがたくさんあってどうのこうのという知識で食育するのは非常に片手落ち、だから、そういう食に対する理解を深めるチャンスをいかに作って、子供たちの体験として、これは自然に体が欲する、体がおいしいと思うというような教育ができればと思います。だから、食育というのは奥が深いなということをつくづく感じるわけでございます。

●農業から派生する「教育」

それから、農園における授業については、もちろん農業の基本的な、肥料の問題とか何かということも話しますが、やはり我々にしか語れないことがありますね。例えばサツマイモの植えつけをするときには、このサツマイモは、「薩摩」というのはどこの地名？ と言っても、今の小学生は知らないです。

例外は、今年6月の初旬に、私が同じように質問したときに、1人だけ、「鹿児島県だよ」と言った生徒がいました。106人の中でたった1人。これが問題児です。先生1人が1人連れてきた問題児です。これがぼそつと言ったので、私はびっくり仰天して、みんなに「正解」と、「100人のうち1人だけだ、みんなで大拍手」と言いましたけれども、問題児って頭が悪いわけではないんですね、協調性がないとか、多少問題があっても。そういう農園における授業で子供たちが心を開放される。そして、問題児だろうと、ますます心を開いて生き生きするというのも教育の1つではないかなと。

そのサツマイモの薩摩という話だけではなくて、吉宗さんという江戸時代の将軍さんが、青木昆陽という偉い学者が薩摩から持ってきたのがサツマイモであり、というようなことを教えるし、それから私たちが、70過ぎの人間だったら体験済みですけども、終戦直後の食料がないときは、このサツマイモが主食であったと。朝昼晩サツマイモで命をつないだ人はむしろ幸せな人であった、学校のグラウンドをイモ畑にして、イモを作って命をつないだんだという話もします。これは我々ジジ、バババしか語れない事実なんですね。そういうことも機会を捉えてお話をしております。事業の一環ですね。

●土の感触がもたらすもの

それから、今の子供たちは土に直接接触というのはなかなか勇気が要ることのようですね。我々は裸足になって通学していましたし、土をいじるなんていうのは日常茶飯事でしたけれども、サツマイモの苗を植えさせるときにどうしても手を使う、これができない子がいるんですよ。ですから、土から得るといのは、今のアトピーだとか何かの問題も、免疫力が低いのもそういったことだと思います。だから、土を手でさわる、その感触、触ることによって得るものはたくさんあるのではないかということでございます。

●今後の展望

それから、最後になります。今後についてですけれども、私たちは、ただ学校だけではなくて、老人サロンという、まあ、地域の老人クラブ、これの食事会なんかボランティアでサポートされていますけれども、それにも食材として出す。あるいは老人クラブのグランドゴルフ大会の景品に農園の作物を出すとか、そんなことで地域の人にも愛される農園を目指すということも多少やっております。

直接作物ではないんですけれども、実は、ここ4年になりますけれども、約300平米の農地の中にレンゲソウの種を4キロまきまして、300平米の広大なレンゲソウ畑を……。このレンゲソウ畑というのは、今、都市部では珍しいですね。我々もびっくりするぐらいきれいなレンゲソウ畑ですが、4月に入学してきた1年生を、4月の末に、そのレンゲソウ畑に招待します。レンゲソウ摘みという遊びも最近のはたことのない生徒がいるんですけれども、ここで遊びなさいというと、花摘みどころか、寝っ転がったり、転げ回ったり、あるいは、どれが花か茎かわからないぐらいにレジ袋いっぱい詰め込んだ子供がいたり、精一杯、生き生きと遊んでもらいますけれども、それもやはりわくわく農園を身近に感じて、農園が楽しい場所である、おもしろい場所であるということが、我々の食育の入口、スタートにしているというところで、いろいろ枠を広げることになったかなと思います。そのほか、こいのぼりを揚げたり、七夕飾りをしたり、いろいろなことを通じて、生徒に日本の、言ってみれば農耕文化の国ですから、この農耕文化の伝統、お祭りだって何だって、それにルーツがあることがたくさんあるわけですね。これを思い起こさせるように、私たちも、日々少しずつ、実を上げていきたいなと思っております。長くなりましたけれども、こういったことを一生懸命やれば、今、世に問われているプロダクティブエイジングの一助を少しずつ具体化できるのではないかなと。今後も精進を続けたいと思っております。

ありがとうございました。

【桑原】 皆さん、改めましてこんにちは。桑原静と申します。
本日は、このBABAラボという事業について皆さんにお伝えしていきたいと思ひます。

ババアでもバァバでもなくBABAラボについて説明していくんですが、主にこのBABAラボという、この名のとおり、おばあちゃんたちの雇用をつくるという取組と、あともう1つは、おばあちゃんだけでなく、実際にはここにゼロ歳の赤ちゃんから86歳のおばあちゃんまで集っているんですが、そうした多世代の取組について、主にこの2点について、今日、皆さんにお伝えできればと思っています。



● 100歳まで働けるものづくりの工房

BABAラボは何をやっているところかといいますと、100歳まで働けるものづくりの工房というのをやっています。100歳まで働けるという、本当に100歳まで働けるのかとよく聞かれるんですが、実際には、86歳が一番上ですね、いろいろなものを作っているということです。ちょっと見えにくいですが、BABAラボは、一軒家をお借りして、そこを工房にしてミシンを置いて、いろいろなものを作っているんですが、隣のおしゃれなカフェの前で撮った写真ですね。この隣に工房があります。先ほども言いましたように、ゼロ歳から85歳、この間誕生日が来て86歳が一番年上の方がなったんですが、30歳から86歳の方が働いていて、30代、40代の方は、まだお子さんが小さい方も多いため、子連れでここに来て皆さんで働いています。



● いつまでも働きたい

そもそも何で、この100歳まで働ける工房をこの地域につくろうと思ったかというところですが、私がそもそも、個人的な理由というか、おばあちゃん子だったということもありまして、自分のおばあちゃんを通して地域のシニアの方々を見たときに、お勤めが終わって、定年の後、地域に戻って何をするかという、何もしていない方もいるんですが、大体の方が何か役に立てることをしたいな、もう一度働きたいなと思っている。

ところが、1回会社を辞めると、自分の好きなこととか、経験や知識を生かして働ける場所というのはなかなかないですね。年をとってからも満員電車で揺られて毎日どこかに通いたいと思っている方はいらっしゃると思うんですね。だから、その地域で歩いていける距離で、年金だけじゃなくて、プラスアルファ稼げるような場所が、しかも自分の得意と経験を生かせるような場所があればいいなと思って、自らこの場所を立ち上げることにいたしました。

●孫育てグッズの制作

さっきからもづくりものづくりと言っているんですが、じゃあ、何を作っているのかというところを話しますと、孫育てグッズというのを作っています。孫育てグッズって、あまり聞いたことないですよね。子育てグッズというのは多分当たり前に聞いていると思うんですが、孫育てグッズというのは、おじいちゃん・おばあちゃんが孫の面倒を見るときに使いやすい、使ってみたいなと思わせるようなグッズを作っています。

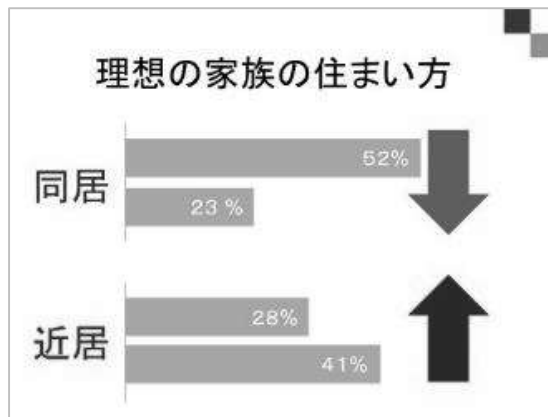


●安全な子育て用品の開発

例えば、今、我々で一番お金をかけて開発に取り組んでいる哺乳瓶という商品がございまして、発売はまだなんですが、この哺乳瓶も、今、売っている子育てグッズの哺乳瓶というのは、まず目盛りがとても見にくい。あとは、こういう、大体プラスチックかガラスのつるつるした素材なので、お水を入れるとかなりの容量になるんですね。それを上げてみると、肩や腕に負担があったり、あとは手の力がどうしても弱ってきているので、調乳のときに熱いお湯を入れているのに滑りやすかったり、安全性があまりないというか、ちょっと危険な事故を起こす可能性があるという、例えば哺乳瓶だったり、あとは、今、若いお母さんたち、町で赤ちゃんたちを、おんぶじゃなくて抱っこしているのをよく見かけますね。ここに、コアラ、カンガルーみたいに抱っこしているんですが、実はあれはどういうことかといいますと、前で抱っこしているので、とめ金が後ろについているんですよ。そうすると、おばあちゃんたちが孫の面倒を見るときに、抱っこはできるけれども、後ろのとめ金がとめられない。中途半端にとめているので落下事故が起こったり、あと間違った扱いをしていたりとか、あとは、例えばベビーカーもあるんですが、今、ベビーカーも、欧米のベビーカーがちょっとおしゃれで人気があるんですが、そうすると欧米の赤ちゃんサイズにつくられているので、乗せるところが高い位置にある。そうすると、下から赤ちゃんを抱えて、よっこらしよと上に乗せなくてははいけない。そうするとやっぱり腰や体に負担があるということで、だったらおじいちゃん・おばあちゃんがもっと扱いやすいような子育てグッズがあったらいいんじゃないかと、そういったものを、集まった地域のおばあちゃんたちが実際に経験した知恵を生かして、アイデアを出し合って開発したらおもしろいんじゃないかなということで、この孫育てグッズのアイデアが出てきました。

●近くに住む高齢者がきっかけ

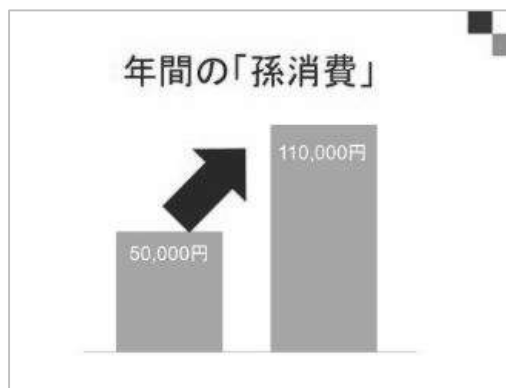
一応社会的な背景といいますか、その孫育てグッズは本当にニーズがあるのかというところですが、先ほど澤岡さんの説明にあったように、同居はとても減っているんですね。これは15年前のグラフかな、に比べると半分以下に減っている。ところが、同居は減っているんですが、近居される方がとても増えています。これはどういうことかといいますと、今、共働きの家庭が増えていて、大体パパ・ママが働いている家庭がほとんどです。



そうすると、子供に熱が出たときに保育園は預かってくれない。どうするかというと、おじいちゃん・おばあちゃんを呼び寄せて面倒を見てもらう。毎回呼び寄せるのも大変だから、どっちなかの家の近くに住まいをつくったり借りたりして、手を借りようと、そういうことを考えているお母さん・お父さんが多くて、それでこの近居という数字が伸びているというところにあられています。なので、このデータを見て、孫育てグッズ、これからももっといけるんじゃないかなとにらんだ理由でもあります。

●孫消費が増えている

実際に、年間の孫消費というのも、10年前から比べると、約倍ですね、その孫にかけるお金というのが増えていて、これはまだ、近くに住んでいればよりかけるという、そういったデータもあるんですけども、やっぱり孫の数、子供の数が減っていて、1人の孫に対する消費の額が増えているというところにもあるのかなと思っています。



●一番の人気は抱っこ布団

そんなわけで、我々はさいたま市の南区、ちょうど埼京線で言うと武蔵浦和駅というところが近いんですが、そちらのほうに一軒家を借りて、孫育てグッズというものをみんなで一緒に作っています。その作り手が、おばあちゃんであったり、子育て中のお母さんであったりしています。

実際に孫育てグッズというのはどういうものかということ、まず1つは、手を動かして作る孫育てグッズというのがございます。BABAラボというのはブランド名にもなっているんですが、BABAラボの一番人気商品はこちらの抱っこ布団というグッズでして、ただの布団じゃないかと一見思われるかもしれないんですが、昔、座布団で赤ちゃんを抱っこしたという経験のある人いませんか。

手を動かしてつくる

首の座っていない赤ちゃんをじかに抱っこするととても怖いんですね。私でさえ初めての子育てのときには抱っこするのが怖かったんですが、やっぱり年をとってきて、おばあちゃん、ひいおばあちゃんになると、孫を抱っこすることにとっても恐怖感を抱くんですね。

首の座っていない赤ちゃんをじかに抱っこするのは怖いんですが、それがちょっと、こういった座布団とか布団のようなものがそこにクッションとして入りますと、抱っこがともしやすくなります。このまま寝ちゃった赤ちゃんを誰かにバトンタッチしたり、そのままベッドに置いたりとかするときにとっても便利だということで、今、この抱っこ布団が人気です。

どういった方が買われているかという、一番多いのが、やっぱりおばあちゃんが自分のために買うという方が多いですね。あとは、一度買って、孫を育てるときにとっても便利だったので、おばあちゃん友だちに、お孫さんができたときにプレゼントするという方もいますし、あとは社内で、職場で上司に孫が生まれて、もっとおじいちゃん、孫の面倒を見なさいよということで、職場でお金を出し合って、そのおじいちゃん、上司にプレゼントするという方もよくいらっしゃいます。これは抱っこ布団ですね。一番売れるときには、月200個ぐらいですかね、売れるときがあります。



●おばあちゃんのアイディアから生まれた商品

次に人気なのは、こちらの、バッグに、この角度だとちょっと見えにくいんですが、電車やバスのつり革みたいなものがついていて、これもおばあちゃんスタッフのアイディアからできたものです。孫を預かって、孫と一緒にスーパーに買い物に行くと。自分はお会計のときにどうもとろとろしてしまうと。お会計のときにお財布を探っている間に孫がどこかに行ってしまう。そのときに、お会計の間だけ、ここを持って待っていてねと言える何かがついていればいいなということで、バックに手すりをつけるという、こういった商品をつくりました。子供が離しちゃえば迷子になっちゃうんですけども、ちょっとここを持っていてねという、結構子供は喜んで持っています。持つところが、蛇の顔がついていたり、動物の尻尾の形になっていたりとか、いろいろ工夫しています。



●孫と着るTシャツ

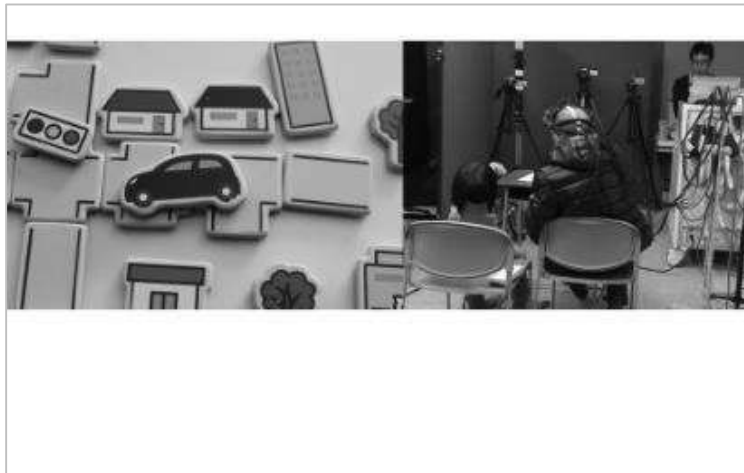
あとは、密かな人気商品は、動物のモチーフの、これは、今、ライオンですけれども、還暦Tシャツですね。赤いTシャツなのですが、孫と一緒に祝いするとき、晴れの日に使うようなTシャツを販売しています。こちらは、今、動物園の売店のほうでも売っております、うれしいことに、動物園の売店で買ってきて、また次に動物園に来るとき、それをおそろいで着てきてくれるというお客さんもいるようで、そういったことを聞くと、またそれを作っているおばあちゃんたちの励みになっております。こういった感じですね。工房の中は、本当に一軒家で、普通の住まいを借りて、このあれだとわからないですけれども、ミシンをいっぱい並べて、そこでいろいろ、あれ作ろう、これ作ろうという話をしながら試作をして、みんなで検討して物を作っております。



●コラボ商品の開発

自分たちの手で作る以外に、ほかの商品はコラボして作っております。さっき言った哺乳瓶ですが、これは3Dプリンターで作った、まだ試作の段階ですが、哺乳瓶というのを、今、鋭意開発中でございます。こちらは芝浦工業大学という大学のデザイン工学部と一緒に、この形を研究して、おばあちゃんたちに実際に使ってもらいながらデータをとって、この形にしております。この開発にもう3年もかかっておまして、時間も金も予想以上に大変かかってしまって、ようやくこの冬に発売にこぎつけるという、今、段階に来ております。あと売らなきゃいけないという大きなハードルがありますが、そういう段階でございます。あとは、これはまだ企画中の商品ですが、おもちゃですね。おじいちゃんと孫と一緒に地元を、自分の住んでいるところを歩いて、その歩いた自分のところの地域の地図をおもちゃとして一緒に作り上げるというおもちゃでして、これも地元の埼玉大学の脳科学の先生と一緒に研究しまして、通称、「ぼけないおもちゃ」と呼んでいるんですが、おじいちゃんがこれで孫と一緒に遊ぶと、脳が活性化してぼけないというところを売りにして発売しようかなと思っております。

コラボしてつくる



あとは、そういったハードではなくて、ソフトに寄っているところもありまして、お母さんがおばあちゃんに孫を預けるときに、今日はこんな健康状態ですよ、今日は熱はないですよ、こういうところにちょっと連れて行ってねみたいな、そういう連絡ノート、孫を預けるときの連絡ノートみたいなものも、今、開発しております。こちらは、今、サンプルを作って、地域の人たちに渡して、記入してもらって、それを商品化していきたいなと思っています。

●孫育て情報サイト

あとは、商品のほかには孫育て情報サイトというのも4月にオープンしました。孫育てグッズを売る中でよく耳にする話題がありまして、おじいちゃん・おばあちゃん世代とパパ・ママ世代のギャップが大きいんですね。パパ・ママ世代はおじいちゃん・おばあちゃんに孫を預かってもらいたいとおじいちゃん・おばあちゃんは孫がかわいいけれども、やっぱりずっと預かっていると疲れますね。でもそういうことも、孫かわいさについつい許してしまって、その疲れがたまって、ある日、爆発して、パパ・ママ世代とけんかになったりとか、パパ・ママ世代は、例えばおやつは甘いものをあげてほしくないのに、おじいちゃん・おばあちゃんが孫かわいさであげているところに何も言えないと。特に義理のお母さんだとなおさら言えないとか、そういったいろいろなギャップがありまして、そういったところを何か埋められる情報を提供できればいいなということで、今、この孫育て情報サイトというのも運営を始めております。